

片倉鶴陵 医案②

富山侯の文学、市川某先生の次子二十歳。傷寒、身熱煩渴、下利煩燥して譫語し、黒胎満舌、其の色漆の如くにして乾燥し、墻を踰えて走らんとす。脈細数。医師、白虎湯を用いること六七日。略影響なきを以て、治を予に求む。

予が曰く、証、白虎に似たりと雖も、脈は白虎の診に非ず。即ち土方煎を用いること三日にして下利止む。猶、前方を与うること六日。舌胎稍剥して、煩燥頗る静なり。但だ譫語止まず。大便せざること三四日。仍て、兼用に大柴胡加芒硝湯一貼へ水一盞を入れ、半盞に煎じ、午前に頓服せしめ、猶、土方煎を与う。其の夜、戌の刻に燥糞数枚を得て、終夜安睡す。及ち兼用を止め、特に前剤を用うること五六日の後、水曲煎を用いて全く愈ゆ。

此の症、前後附子剤を主とし、其の中間へ柴胡加芒硝僅かに一貼を用いて大功を立てたり。療治は、此の如きの場所が手段の簡要なり。